

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

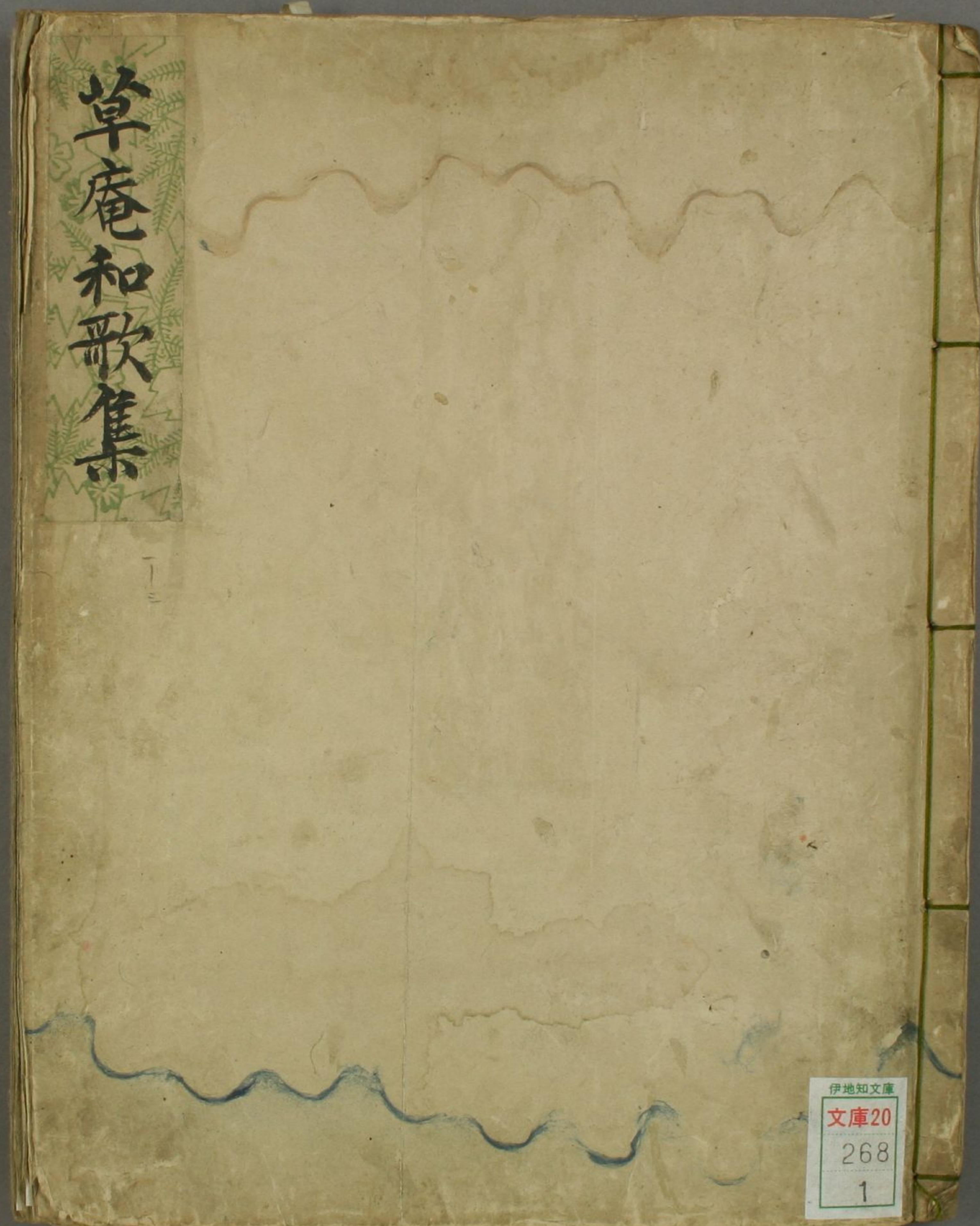
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10



草庵和諧集卷第一

伊地知氏書

春哥上

二條入道大訥言家十首春立

相禮多るひきかけつまむゆのまうまくいふ事や立

中院宗法親王家六十首小

りのあまきよせんの相続のゆくや震すらふ

立春冰破

ゑふかくあわくわく河の岩もと溶けましらる

初春

相如や志水かづの音はうつにゆき用をまや福

山禮

まみやまめのまくわねぬひさすく角と筋

初春學

寒風れぞ北風よりの足行ひ一乘めれまやあらじ

和詩而三首や早春

尼久野山下せたむかづく鹿の山あらす地方

寺持院贈左大臣あら六首了

もとて山の雪けあつまきに松原すきて三鹿あ

日野大納言家三首歌や早春禮

うがた高げりやもて朝日新づればすしまうね

寺持院贈左大臣家三首雪中寄

ゆう雪ひかくめに角がまに西ありまほりとわゆめ

前あら六首

もとて山の雪は未だ春をあつまつてこ細雪に临てさく

梶井二郎は親王歌や早春

またまくやく也花かとおどりてつるふ君が家ゆく

右學あら六首

水うらしもあらかとえとたまくみはれとさくとせん

鸞鷺右谷

ひうちあら右谷のゆうしのうひをはづくやまをれ桂木

法下洋井井許ゆて是れともうとすうすけのふなつ安

風さくあらかとく雪はなづるだよしあふるる

院寄附

冬竹の葉ひかづけのうじれ葉がる葉をれぞあら

野寄附

さか三也くとくまの野すぢりかく雪

寺子戸の通大須云あす向よ十全哥  
寺子戸の通大須云あす向よ十全哥

日野大納言也三首  
かくの此内故

重慶院二年法華山中前之學

卷之三

雪中看菜

らひき力あはく  
ゆゑの雪  
一葉の風  
着葉の雪風  
あはくに風  
野に風  
れき  
れき

彈正事新上西寧首哥小若素

西漢書

獨吟百首

着草木、  
のれども  
の意に  
あらわす  
るはん

同你計  
家三子

孫子平叔丁亥年夏月  
書於青霞

孫東野

不かくすのうふかはまことのとくへりてるの方  
とかくわくはむううんたら日ひひかひせきを

法眼慧與の西也

哥

山すみえふすやほほん日就の事ふのうりを

野猿

まかくらる河あらわさねうふかまくしてのうすの

法下洋井月次三首か薄雪

せの清の所のとくよつよつわづかはまうくあうく

清の左大納言家向たま水篠寒

かくひぬる雪のまくらぬかまよたゆもあ

民ア輔氏經あく哥く子仰く早春水

かくへあひあひ流うれくわゆこまちゆうあ

懷光明院前用白鷗かく山渡

あひかの風つかはせかくもあめくふく羽櫻

春哥

尺雪のうとせかくはねくせんけのくふまくすく

者くまくすくはくもくわううとくすく夜まくすく

捨原

尺雪のうとせかくはねくせんけのくふまくすく

すすくはくもくわううとくすく夜まくすく

クア

わくわくやうすくすじやうか入くしろうとくの

賜渡

この事せむりとよろしまと夜のゆりひりにすけむけ

二郎入道大納言家十首か麗

とくふうじりもとくちる浦の松あきらむとくすゑ

海色霞月

浦のことはきくもれや霞く御はこあれひのくわら霞

誰はすほのふくみのひ霞む

達良三年因裏千首かまう天象

わきだけ霞へりて因これ浦からあく霞むの霞

海霞とよふと云

そりあくこすの浦のまつりあそち（そりあくすじまくわの

左庵入道和義すすえゆは浦の百景か麗

浦（ましめ）のれのまつて松（まつ）の浦（まつ）すくいすじまくわ

彈正手歌と歌ふ十首哥か麗

浦（まつ）の浦（まつ）の浦（まつ）すじまくわ

涉（わた）る入道大納言家句十首

志（し）めの浦（まつ）や冰（ひや）あくふの浦（まつ）すくいわやさざる

河色霞

まゆ（まゆ）うやまと（うやまと）まゆせ（まゆせ）まゆ（まゆ）うやまと

せゆ（せゆ）うやまと（うやまと）まゆ（まゆ）うやまと

橋色霞

二月鉢毛

南（みなみ）の浦（まつ）をさむ（さむ）北（きた）をさむ（さむ）霞（霞）すくい

和歌兩三首寄小楊

在の元を経りて、より相が、えりせもかほひま

医戸の家三首下)

むすびに此道のまゝとおもむけたゞのふきの白梅え

雪灌院三京家三首小首か墨梅

く黒れ梅乃御のせうきとらじゆすの神のまめを

梅薫凡そ事成

梅つゑぬる御美墨つかは西、まやのゆのだけが

園庭梅

景物のあうちうづくはうと、人をあけし行の梅え

雪中梅

さくさく白花つて、忍冬をいはせれ梅小ほう春

庭梅

わづ梅がうた、せよせよおもえ梅がうたう

拂す君大綱云家三首梅薫神

花うきれややくじ梅つゆのりとて、うとも歌

同家三首下)

ねくじつひくさくびよの元またまきはくへ通

二藤入道大綱云家向きが行梅

ひじく神のあれひよくかね本とまきひきわ

刑部輔廣房家三首小梅

すりて花の本とまきすみう膳す、浅くまき梅つゑ

古宅梅

梅のむかへ事葉とあわてて、金とほてて、あつて

獨吟百首下)

しきこと月のうつむくとて樹つる句のよの書

医翁御家十首か夜梅

じうは元句のやえかづらわくとよし月、春を花

月前梅

梅つばきとくす句すあらじりめのまくらと露

雨をとくしてねうれのまわが梅つ香かく月にうすまろ

朝霞

梅つれいのそりかなりつてゆきと神の月のす

寺持院贈左大臣ある首寄か梅

わ社ひじく句かなりかけりとあるすく梅下凡

二條入道大納言家十首か夕春雨

じうだのうて葉日よはりたれのよの月とくらか書

兵庫下野秀家ゆき、夜春雨

すすみつまく日氣とのくらせりよひよまわ

様春雨

かくすゆはよひく思まあかせりねゆ様春雨

河春雨

ほと風くわ日すてうりまゑれ音すがりよひよまわ

なつまゐ

ゆえくか転ぐり萬のひあら勝のねかまゑれす

医アハ赤百首か雨中柳

まくわれんよりタマクアシ柳のとくりうげて春あん

ゆかた大潤ま東京季百そノ

月柳のむしのよけりむくまくの河原にしや

前用白家ゆゑの柳

きづけとたれととくと相應のじよとすうれに柳の

二藤入道大納言家三首アリ

岷山と凡てのよりやし又あつとむらの青柳の家

後墨庵用白家ゆゑの柳風

あせ柳のあいとえまといのとうすのまくとひふわ月夜

独吟百首アリ

秋うととくれづれゆきやもとゆくありのまのまか

彈正事新家三首アリ

一すのりととくめの家は世とや林とくらむ、ゆのん

医家百首がほ夜曲

念れわきうるしゆかみゆうひ臘とじくらむ

幽齋

清うりゆき世とやくすの所とれ聲とす物とむのん  
かくうりゆきはとくすとめりうまれるすゆま  
音方とくすむをすじよれはとむとじよま

鹿中幽齋

かくうれすんとくれすまくふあくのめかりれ一列  
實方さうりとくれまくくかられすいすやもじ一列  
二藤入道大納言家せさうり小東山すかゆすすじよまれ

怡か幽齋

花れゆめとすくめかくすじやまくすくらむ

育ちあくせ

心小室代とすくめかくすじやまくすくらむ

うしとひとあらむあわせがまつもとうのじえ

洞海石

洞の海やけりすりあまの神てほからくまめ  
ぬの黒れりあらはのうるをとせどんあらはる

梶井二京は歌三首か海をゆ行

ゆきよこじゆきよさくゆうすり音やくわの衣

獨吟百首下

あれば海のすじ流がくゆとあふすくゆの行  
ほ世を前用ひ家かく夜ゆ行

月夜のわらげざくはくとすよそわらげ

臣アハ家三千首下

西氣とよつまじまの多の月がまでかる

購海石

山ゆうりとまく波とすじ東かくやの月がゆ行

浦の右入道大納言三首山看月

むけせ山のあくすじうとゆぐの月がゆ行

極雲前用白赤ゆて喜月

月をもととよづてね山のうへりうかきくと記

二條入道大納言句集小春々月

ありこたてゆれわくまほの月すじゆはとせ

重護院卒首哥下

歌うるをゆく神のあんごくゆくゆゆくと歌

去哥下

一セセく歌あくゆくすりうじゆくゆくと歌

シカニヤスナリハセマセナリテヤホシハシタ

八道前太政大臣ニ三首ハ春月

喜の日月ハシタハシタハシタニルヘタ

雙杯詩ナリハシタニルヒ月吉日西行上人昌日

二条大納言家ナリヒニシ首哥謡セヤハ春月

明やヒ紀ナリモアリハシタニル月夜セヨホ歌

二條八道大納言三毛河ニ春月

ガニヒニル歌ナリハシタニル月夜セヨヒ月

臣アニ家百首哥謡ナリ

又歌ナリハシタニルシラシナリヨリの事の歌

雪後院は新ニヤ四聲歌ナリヨリアトモヤハ春月

トニキナハアヤハシラシカミニシテナシナノの事の歌

元亨の近ニヤ大納言歌哥合ハ春月

ウラカムクナサカアヤハシラシナリハシタニル歌

春曉月

喜の日月ナリモアリヒニシ首ハ春月

彈正平野ニシ首ハ春月

ナリモアリヒニシ首ナリナシテニシの事の歌

臣アニ御家ナリニ青三首

喜の日月ナリモアリヒニシ首ナリナシテニシの歌

曲水宴

同上

御子内納家同十首か待花

まのとは高とあらむゆきをやつせふ山梨む

鶯

ありまよしゆすみじく風のむねにわくめ

雲雀

霞先きやはりてかくとえ勢のむかう又ひもむ

草庵和譜集卷第三

春哥下

小倉太翁云すくわい 小野祐三首か待花  
まむし山れざれやうじよまにいたる風  
薰好すやく白 洋光院三首か待花  
山風すゑとく風すゑとくむかとせき去れ  
寺持院贈丘大吉家六首か待花  
ゆふる花のさよとくとくつかはづきよまめひま

花哥中

喜とてゆくとまことのじ花とて

民ア卿家百首か待花

とてゆくとまことのじ花とて

ゆゑのく大納言聖三首か國臣待丸

山里はるくとてひじきか花より氣もすまき生す

民アソホ十首か初花

一木あらわれよしのうりあて山のあらわせむとゆ

共庫ひ長秀哥ト子仰（シテ）か初花

さわふけりせん枝うこもとえみたせんじくと

前藤大納言法性寺を下ゆて薄葉花十首か

山あやまきのとくわざねくらひ霞のふねきの日雪

花のれいの山爲せよけりひへえよせすや雲風也

あらのあらかづまくよひくの風もとすさうに

彈正朝一家三首か花未西

ちきりとくの隠のよみれりしきれのとくせもやの

花すや

まとひのうけくら踏りて花のあくなどうの  
くわくわくとあくわくわくと山の霞と匂のあくを

やわひすかぬけそどりかくと雲かくときわくとやの

彈正朝一家三首か花

鹿の山遠山ともせゆくもかすれおの日かみやか

浦のく大納言聖三首李百首アリ

山里はるくとてひじきか花より氣もすまき生す

民アソホ十首か花

藤原宗基のゆきやか  
寺か鹿中花

雲かくとよみくのとくわくとのぬうひの橋にす

入道前太政大臣家ゆて元

山寺の事と曰ふが記すも句の上をゆくと  
三玄院僧正清示寺ゆかに題はらてを書置候

小花句

せうせや雲よりもさへむるよし所の素が

同伽井家花十首か

山の事もいふとくさき花たまがあらぐに山の事  
花の事はすばらうま風かすとあらぐに山の事  
まの事の事かまに山の事の事の事もあらぐに

達武三年四月子首素地極

山の事の事かまことあらぐに山の事

山鶴花

山の事の事かまことあらぐに山の事の事かまこと

青蓮院入道二部新歌三首小花ゆて用

うづくとさうねのれどくとくとくとくとくとくとくとくと  
民アヒキヒニシテ傳の次か遠み花とく事以  
てかきかの遠山すりおりうもあらす風ふけりむの

小鶴花

まの事の事かまことあらぐに山の事の事かまこと  
あらぐに山の事の事かまことあらぐに山の事の事かまこと

喜山花

山の事の事かまことあらぐに山の事の事かまこと

夕花

山の事の事かまことあらぐに山の事の事かまこと

東山佐竹  
は前藤大納言の筆也

ゆくゆくゆく

まむれありこそ山桜花があつたとぞわらか

返

本邦かじれんわやせよとぞいひよりむじゆま

夕花

蟲鳴れよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

見花日暮

丸あはく思むはまのゆふがすくにれ鐘の音  
侍徳中納言和琴前壽の音の花はくはくはく

東山花十首

ゆくもよしむるをもるてするれやくをもるのゆくも  
ゆくもよしむるをもるてするれやくをもるのゆくも

湖花

あらまくにさくあく高くきりかけの花よれね

河魁花

充てせふねの川のゆくもよし花よもよしよもよ

源大納言東十首哥倉かわ花

わ花

もほくおもくのよもよもよもよもよもよもよもよ

西アヒヨー百首かわ花

すりてこれ我古とみかん櫻花をさぬかまひて

さあ

あがむもあとくめん櫻花よりとぞさうとせ

花桺

ひら花うめきのさゆきもかくとぞさうとせ  
共庫は長秀寺とぞお哥とう子侍シテ  
ひそかに花はなりとぞさうとせ

花桺歌

ひら病れさうとぞ花うめきわおのふくとぞ

汝衛前用日敵ゆく壽元座懷

ひそかに花ふくよく一やくも危うまくつ

前用日敵とぞ

さのすかに花ふくよくせもゆく 病れ花の

清園奇花百首ホ林序

ひら花うめきわいと百種あらのさゆきとぞ

文保二年清園裏のり園アニ此園裏かひどき

さくひくあらひとぞわく一やくも一せと

ひそかに花ふくよくせとぞおやまと

せれやとゆきとぞせとぞれりやうて君をすと

右京極史光吉相とぞ花のさうりかとぞ

とくほく 小雨中花

まくわが志向多く花ふ下病れ雪うり花の清園

同伽井家ゆき古溪花経

そりあぬれのさうや若狭づねねもつま  
花院大納言家詩寄合喜膳  
あらわゆるむちかくおひりすけすやうわ日め

源大納言家詩寄合喜膳

よとひもの静のよがりよおとひものよ  
青蓮院入道京都家三首月夜花

将軍家三首月夜花

かのすり家三首月夜花

夜花

まほるの月をものかみかなまほるの月を  
蓮智院入道京都家三首月夜花

祐ありあらわの月の家三首月夜花

西風あらわ

春の夜花あらわの月の家三首月夜花

花下送日

かくよみうせのすのすくありのまほるの様の  
津守大納言家三首月夜花

ひてまにうれぞうきあわせうれぞうきあわせ  
前用日家三首月夜花

いぬはくわあらわの月の家三首月夜花

西園院二承家三首月夜花

かくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

片山大納言家三首月夜花

山中花り花の日すばれあがひきにせきもとくわ  
あらわらりかわねの玉脂をくわゆのむさり  
さかゆすてんわらうじまくつわのたつも

### 山鶴花

やま鶴りあはねのあらうじ花とすれまほりくせ

### 藤大須家月次三首アリ藤花

さく花半やひる山鶴花にいづくまほのま

### 清園寺花百首アリ藤花

山せれなむよとくとよれりひづすとととお様  
國の家小春代さうて哥よゆうてふか御藤花  
ひり葉と花のとよれ消わる花れうらの外  
開か井戸ゆえ夕落せ

ひととく風葉と家のみりれかとみすよと花の風すよ

源宗氏家ゆゑ河瀬花  
傳信通春下大須家傳明らうす源宗家

### 老松の花ゆゑ河瀬花

ひのくの花ゆゑ河瀬花

### 山中花り花の日すばれあがひきにせきもとくわ

### 青蓮院入道京新家ゆゑ河瀬花

室はくふくとくらく瓦瓦あるの庭のせうりも藤花

### 添えありくゆゑ河瀬花

さく花夜甘とくはくとめねとくや

### 侍後牛乳もさうりあみのまくつとすくまく河瀬花

ハの花もさうりいなはくはくのばくとくと藤花

### 夕露花

うきはやにうるわとひく風  
まよひむかひてまよひむかひ  
は性す元十首

は性可充十首  
松金のせ乃ふ山  
竹也だらもよきもん

卷之三

北元の事は見えず櫻花は月夜の風  
青蓮院宮ゆゑにて衣冠作  
慶運は下ゆふ事成り  
あかれ志兵衛も五つむ西丸京の所を

高  
山  
記  
事

此のまことに此の事のあらわしもとれども  
かくかくの御詠歌四十首 菊花

وَلِمَنْدَلْتَهُ وَلِمَنْدَلْتَهُ

清風等花百首  
丁巳花鏡

むかしやさうりて  
幼いれの頃せんじん

所著記

筆相の事も志も思ひて居たれど、一之手せんじ

清風可也。丁酉年。漁父。

花  
著詩院賜處士  
三首池齋七

獨行白首

あひあらへとお見せふたうへ花あとわくすの多處

は性寺花十首丁

とあねむとつりかよしむせばはくとれ花の多處  
まじてのけき風に風に風をよむもくうちな  
日よりてちゆうの青葉かくらひりねとくらすら山櫻

大寧院咲佐實家ト花歌十首小

乃うもむかでね青葉れ相りをいきるあえり櫻が  
東山かすけは比西山の花れどふとひあひ  
さくわはほくもくと

紫れあそひくすりわらんねの花れまはくを

セ

前とひやまへとあめとあらへくもくと

ねうかぬとく花

やうじうぢうこれや段の桜花あしたての君のとすり

西子大浦家向十首小疏花

ちりをわこうすくもすくあひとすくかまくみ  
と花りく

おひくね骨にとてゐすいとくわさくせび

西護院入道新家三首山櫻花

あくどうかねわははなやまくくへつりそのとすく

新春家

じひととおはくわくとくむりとくにとく

ひよだ大納言句十首

じよよかくとくじゆくのけくろせのとく

冷泉大酒云家かて歎え

苦心別れしとひにけんとあゆとれどもあわせのま

和琴前ゆく前あらば

うつ月夜あやめに山にあけさんまゆきすり物

河麿丸

うた河乃うけまづゆくやうりとゆる春ゆまみ

二藤入道大酒云あゆて歎え

じまくせくをからむ山に花のゆきゆの志み

雲霞院卒首か歎え

ゆきふげつ半弓流川乃は雪とりかわらく風の

お森院贈左大臣ゆく首アリ

まつみかねふかくよしのうとくのうとゆの山の花

は市定宗精すと哥精ゆか歎え

じゆきゆの聲がゆりゑやうゆの竹の葉を志ちひ

四季百首アリ

花きともよむとあむとあむし方びら川の山の花

大膳大夫東康あゆて歎え

ふくらむすやうゆの山の高からうそまかみやまの

鶴吟百首アリ藤

ひうちやくかみまうとまきのとあむとあむふかくとまき

基有ゆゆかくと寄合志也か木と藤

田の浦やなまきのねのさかうりの花と多く

比着アリ

浪あかこすゆの教ひつけとて心かくがよしの歌

松と藤

さくやねのふかうすは萩のむきせぬ涼のくわくと風

言春教代

まうらうらあひよまはるにゆけりこれいだらて有波の元

庵室れ軒乃翁歌代

ひさかの雲ともやうそゆくもや軒のあめむたる

ひすな大御云東句十首か躰躅

皆おれのあれども争ひかぬこよひしきりよ

言春

花もよやうりわうほ情まわゆもまたわれてやん

茅村院贈左大臣もゆて言春月

應長が代危地りてでもかじゆくま

室あらじ月日をちづれひまはせはうさりかまひま

言春西

ちゆゑをもじる川根のまみあうすと西庭の神やゆ

言春

ひりよやつ花のあめうすまかやとうやくまのま

前首大御云東月次三首二首盡

よのとすやうをめくらひのうよみかまへ

民が御みす首

けゆくとお情ゆふすとあらひけり言うとくとま

萬葉和譜集卷之二

夏哥

更衣

卷之六

也。故其後爲之者，莫不以爲子雲之賦，雖有過庭，而無過庭也。

故都集

凡にやさしからうるはすからぬのをせしもが思ひ

國の家三首下易能元

ゆかねどよまえをうたひ移去のほとくアヒー

餘花を

ともとの原へんゑを主様とうはのよ並行

和歌而月次三首庭形樹

庭の西れむれ氣れわす月のわすれん葉の

月入道大納言歌句十首余花

余花のさりてれどもおとこよほときを海乃

社御歌

余花のさきより歌ひゆふやれりの裡れす

清右大納言歌句十首御歌

ゆてと月とよす御歌とありて尼くも

夜余花

夏の夜の宵の月とよす御歌とよす氣とよす

月入道大納言歌句十首符舟

月きたりとよす御歌とよす氣とよす月とよす

獨吟百首下

ゑどりめゆびくあべしこのやぶゆとよす御歌とよす

月入道大納言歌句十首茶

春はる若葉とよす御歌とよす氣とよす月とよす

夏御歌下

さう代やうあうふすりわ歌ひよす御歌とよす

青荷院謹左官歌三首藏前

はへにかくはれまく  
かひのうみゆめのくわく

重吉社哥倉ノ

玉爲神御んはまのきれくとよかのくもとくの金身を御

彈正郎とお平を郎云

あらぬうけいとく風の郎云

雪齋院二郎郎とお平を侍郎云

おはとみづれ若丸とお平を侍郎云

郎とあらね

裕とひくせり郎とお平を侍郎云

娘ちとよどりとお平をお平を侍郎云

黄梅院贈左官とお平を三首アリ奉郎云

月とりひひあらひとお平を奉郎云

ほおとお前用日暮やと霍ノ年通

月とひつし来るとお平を奉郎云

前三河ち高家とお平を比とお平を侍郎

かとくうりあすとお平を奉郎云

青梅院贈左官とお平を奉郎云

はまかとお前かとお平を奉郎云

三章院僧山とお平を奉郎云

一ふかのうとお平をとお平を奉郎云

國つ高田十郎百首山とお平云

おとよみの歌とお平を奉郎云

かすかとお酒とお向とお平を奉郎云

おとよみの歌とお酒とお向とお平を奉郎云

初部云

木有ありの御

はくまのうへりてすゑのひかせをしめ

彈正郎三首丁部云

内と方角づきのれどもとくに事あらば

國アリあひてメ部云

林雲アリかくありてはのよつや風むかひ

有家君仕向セ仰三首夜時

前藤大酒三首次三首

部云

西宮御家五首

花院入道中雲家五首

院アリ家アリ勝部云

かの子の名をわざわざすゆりき方へ教わる

初部云

引ひとわざすゆりき方へ教わる

壁櫻院家五首

ひのうすみのまめに花くわがおの本とぞ

彈正書三首  
庚子年

唐詩

此水の事あればモト時を思ひておもふ  
かあえんと  
山の事あればモト時を思ひておもふ  
かあえんと  
山の事あればモト時を思ひておもふ  
かあえんと

のうすのくわ  
一考より  
思ひの外の見  
東山かすけゆ  
比侍達中雲がる  
對する事もあ  
あかくわせて

ありてあらまことあるて  
あらまことあるて

獨吟白首了

おきにあてておれよかとおもひ  
うなづかへるはうの葛世や教

才子の筆を  
おもひてゐる  
かくはうす  
ゆきのうす  
ゆきのうす

五  
五  
五

宋人也。予之不識，固爲  
可憐。但不知其人，亦復何  
能。故不以爲奇。

正月五日  
泊曉江

かのよしにくるればうれしことをうなぐる

前大納言處あひと御云々

かくはりの里へんむすとすらうのまやの原を

重護院平首か早苗

わが身のまゝや口づきはうめくとてさゆく

歌ふらうべ

せんやすとくらん松の葉をもわらひ

八道大政令家三首山田

山のあらわのひのくわくもあくもこくも  
梶井すすきはこうて開合せしゆふ早苗  
からりともゆきりまつてさくさくと風やだづくさき

夏うやか

金華寺三首丁

あくも津田代をみつ成つすかくいとくらかくわら  
養持院贈丘大曾坐ゆきはうて平元ああ

早苗

あくもくみたすすりゆきゆきすくわゆせん

山の下大納言向十首丁

志摩まね船くわきて津田のせうやまとのむと  
贈丘平元三首丁り様すく

もとくわくじもとくわくと里、志摩とえびのとくわく

同歌ゆき昌浦

石川えりやかのとくわくとくわくのゆくすく

蓬昌甫

かののわのひの西家とりよすせあらんぞ

あき昌甫

かくかくうるゝれのけじてあらむほり夜郎

ゆゑ大酒家ゆきて昌甫

かくかくうるゝやかにたれまゆやまくやく深

月夜句十首か事

夜遊梅

かやちへ花梅の夜遊をすとくも首歌

國語三十首歌

かへづくはすとくもさうがるる歌

同家十首ノリ又本

まことやれらへてかねくはすとくものひじ

獨吟百首可

名のこゝれ山を相智の景をとやれらへてのひじ

長秀夢かね育み

育みやうめい若さみつむかひてのむらまくらめ

亦用日版かて育み

もかじとよのれあけきとくのむらまくらめ

ゆゑ大酒家三十首か歌育み

やうしむれまつむらめ育みれもこむらまくらめ

全集奇かて育み

かうしつきめうりやあらむ河原すとくの育み

唐宋百家文选

卷之三

前用四加也河也貞也

重慶院中首

大業年間  
西突厥  
の王族  
の書

其の上に、  
其の上に、  
其の上に、  
其の上に、

馬もさへ  
あまうせん  
あくせん

あくよみれにまゆわづちの  
御事

傳世子郭正學之子

وَلِمَنْدَلْتَ وَلِمَنْدَلْتَ  
وَلِمَنْدَلْتَ وَلِمَنْدَلْتَ

江寧府志稿

あはれかとやうの浦を今すまゆく  
宿

卷之三

竟不復出

日月  
天子  
萬世  
無疆  
永固

卷之二

通有事の時

花兒院入通大納言處也

官あつてすくに身もてや能よし人をも構ひそがま

### 野宿

夏まきゆかのうのすらうんせきのあはせり

### 源大納言詩合及翁

文子乃吉けのいはまくと御ふ　萬葉　ふくらひ  
建武二年四月十日　か及在の

よの葉れさわづ代か夏まきゆくちう道風

### 國ノ御家十首　か夏景

夏草　か春　をあくさうじきよけの　康のひづね

### 聖一草

夜々そしむ草　ああはすれよしよぞうの露

### 西アツ象巣詩合　か風前夏景

夏まきゆかのうの新の葉　せうすうの露

### 夜夏景

夜に雨をきかぬともあらひつゆくとまほれく

### 金童寺三首　り照夷

夜の雨かとすの夜かとむれつけの秋　定時　おどき

### 青松院賜古良辰　か首　鶴川

む鶴や士鳳　のほづくのよとあるあらわる事　か

### 雪院　か首

まつりのせのひゆとそやまくとこあもあひを筋

### 前赤大納言家　か次　か照射

ゆわゆけのうかまくとまくのすかゆくとまくとまく

### 拂方大納言　か首　か

小庵山の山はまづの山にありてし庵宿

脇や三首アリ講文殿射

宿本の山アドヤシホモアリテ此病アマリセ

獨吟百モアリ

歌とぞを意致せば心事の仕事もさへ歌歌

山夏月

山てあらわす山也山也山也山也山也山也

夏月

山てよからぬわざの山てよか山てよ病てよ病

金葉寺山アリ

木葉の落葉山の落葉山の落葉山の落葉山の落葉

山相家山アリ

かうの山の山と山の山と山の山と山の山の山

入道前大政大臣三首山夏月

夏山をす方を石ノ子山の山の山の山の山の山

夏月山

いよまじきの山の山の山の山の山の山の山の山

等高院塔庚午山三首山夏月

明うえすかのうりくとおと無うあらすかのうの山

同歌五首アリ

山の萬が山の山の山の山の山の山の山の山の山

花院千葉波五首山夏月

凡ての山の山の山の山の山の山の山の山の山の山

前用日あゆて轟夏

乃つ東のカモハシノコロボシトキナムの山筋

雨は五月

タリタリヤウル乃の福ヒシモカシマリテ

和歌乃三音アリ

夷引乃もひきひととよもえんナシ

江華代

伊勢海のさのねつちか轟アモリノヨエビス

セ羽ち貞松哥ドナキ

セモシカニシキニシキハリカシケリモトモ

河を轟

西ノ河ツクニシキハアモトモ先アキシカシカ

西ノ河を轟

ハシリセアキシツハ半アキシモ乃シカタアラシ

彈正平新アモトモ

アモトモ被スシホシシホシモ乃シカタアラシ

序ア方大酒云東月次三音空前轟

草向轟

ほりとまわらひちと思リヒミ葉すとの鳥小秋ア

陸奥名額氏是ナヒトテ歌合志伸アモトモ

アモトモカタマリアモトモアカナヒケヒ

モアモトモアカナヒケヒ

卷之三  
金匱要略大成

北  
京  
大  
學  
校  
圖  
書  
館

卷之二

野  
芳

家様の事下りやかにとて  
市中の商ひあつて氣が足る  
重議院へ通郵便あつて同様

下門道新著書  
其一  
其二  
其三  
其四  
其五  
其六  
其七  
其八  
其九  
其十  
其十一  
其十二  
其十三  
其十四  
其十五  
其十六  
其十七  
其十八  
其十九  
其二十  
其二十一  
其二十二  
其二十三  
其二十四  
其二十五  
其二十六  
其二十七  
其二十八  
其二十九  
其三十  
其三十一  
其三十二  
其三十三  
其三十四  
其三十五  
其三十六  
其三十七  
其三十八  
其三十九  
其四十  
其四十一  
其四十二  
其四十三  
其四十四  
其四十五  
其四十六  
其四十七  
其四十八  
其四十九  
其五十  
其五十一  
其五十二  
其五十三  
其五十四  
其五十五  
其五十六  
其五十七  
其五十八  
其五十九  
其六十  
其六十一  
其六十二  
其六十三  
其六十四  
其六十五  
其六十六  
其六十七  
其六十八  
其六十九  
其七十  
其七十一  
其七十二  
其七十三  
其七十四  
其七十五  
其七十六  
其七十七  
其七十八  
其七十九  
其八十  
其八十一  
其八十二  
其八十三  
其八十四  
其八十五  
其八十六  
其八十七  
其八十八  
其八十九  
其九十  
其九十一  
其九十二  
其九十三  
其九十四  
其九十五  
其九十六  
其九十七  
其九十八  
其九十九  
其一百  
其一百零一  
其一百零二  
其一百零三  
其一百零四  
其一百零五  
其一百零六  
其一百零七  
其一百零八  
其一百零九  
其一百一十  
其一百一十一  
其一百一十二  
其一百一十三  
其一百一十四  
其一百一十五  
其一百一十六  
其一百一十七  
其一百一十八  
其一百一十九  
其一百二十  
其一百二十一  
其一百二十二  
其一百二十三  
其一百二十四  
其一百二十五  
其一百二十六  
其一百二十七  
其一百二十八  
其一百二十九  
其一百三十  
其一百三十一  
其一百三十二  
其一百三十三  
其一百三十四  
其一百三十五  
其一百三十六  
其一百三十七  
其一百三十八  
其一百三十九  
其一百四十  
其一百四十一  
其一百四十二  
其一百四十三  
其一百四十四  
其一百四十五  
其一百四十六  
其一百四十七  
其一百四十八  
其一百四十九  
其一百五十  
其一百五十一  
其一百五十二  
其一百五十三  
其一百五十四  
其一百五十五  
其一百五十六  
其一百五十七  
其一百五十八  
其一百五十九  
其一百六十  
其一百六十一  
其一百六十二  
其一百六十三  
其一百六十四  
其一百六十五  
其一百六十六  
其一百六十七  
其一百六十八  
其一百六十九  
其一百七十  
其一百七十一  
其一百七十二  
其一百七十三  
其一百七十四  
其一百七十五  
其一百七十六  
其一百七十七  
其一百七十八  
其一百七十九  
其一百八十  
其一百八十一  
其一百八十二  
其一百八十三  
其一百八十四  
其一百八十五  
其一百八十六  
其一百八十七  
其一百八十八  
其一百八十九  
其一百九十  
其一百九十一  
其一百九十二  
其一百九十三  
其一百九十四  
其一百九十五  
其一百九十六  
其一百九十七  
其一百九十八  
其一百九十九  
其二百  
其二百零一  
其二百零二  
其二百零三  
其二百零四  
其二百零五  
其二百零六  
其二百零七  
其二百零八  
其二百零九  
其二百一十  
其二百一十一  
其二百一十二  
其二百一十三  
其二百一十四  
其二百一十五  
其二百一十六  
其二百一十七  
其二百一十八  
其二百一十九  
其二百二十  
其二百二十一  
其二百二十二  
其二百二十三  
其二百二十四  
其二百二十五  
其二百二十六  
其二百二十七  
其二百二十八  
其二百二十九  
其二百三十  
其二百三十一  
其二百三十二  
其二百三十三  
其二百三十四  
其二百三十五  
其二百三十六  
其二百三十七  
其二百三十八  
其二百三十九  
其二百四十  
其二百四十一  
其二百四十二  
其二百四十三  
其二百四十四  
其二百四十五  
其二百四十六  
其二百四十七  
其二百四十八  
其二百四十九  
其二百五十  
其二百五十一  
其二百五十二  
其二百五十三  
其二百五十四  
其二百五十五  
其二百五十六  
其二百五十七  
其二百五十八  
其二百五十九  
其二百六十  
其二百六十一  
其二百六十二  
其二百六十三  
其二百六十四  
其二百六十五  
其二百六十六  
其二百六十七  
其二百六十八  
其二百六十九  
其二百七十  
其二百七十一  
其二百七十二  
其二百七十三  
其二百七十四  
其二百七十五  
其二百七十六  
其二百七十七  
其二百七十八  
其二百七十九  
其二百八十  
其二百八十一  
其二百八十二  
其二百八十三  
其二百八十四  
其二百八十五  
其二百八十六  
其二百八十七  
其二百八十八  
其二百八十九  
其二百九十  
其二百九十一  
其二百九十二  
其二百九十三  
其二百九十四  
其二百九十五  
其二百九十六  
其二百九十七  
其二百九十八  
其二百九十九  
其二百一百

董文敏先生集卷之二

アシカシタヒロノ海色打下の御事也

中華書局影印  
宋人集

卷之三

出立すがまに  
の葉はかく風  
吹きむれども  
かく山の木も  
入道大御事  
あら三首

朱子語類

三月里の風が吹く。一月は雪と冬の風

夕立

夕立の音が聞こえてくる。夜の山風

山輝

やま風の音が聞こえてくる。夜の山風  
やまの音が聞こえてくる。山の風

夕輝

夕日が沈む。松の音が聞こえる。夕輝の音

踏車賣家三首絶涼

踏車の音が聞こえてくる。松の音が聞こえてくる。

雲相思待哥合小夕ノ絶涼

雲の音が聞こえてくる。音が聞こえてくる。音が聞こえてくる。

夏音夕ノ

和風の音が聞こえてくる。音が聞こえてくる。音が聞こえてくる。

ひる方大納言歌三首雨は夏月

ひる方の音が聞こえてくる。音が聞こえてくる。音が聞こえてくる。

老病院賜車賣家三首絶涼

老病院の音が聞こえてくる。音が聞こえてくる。音が聞こえてくる。

左衛門依和義経歌三首絶涼

左衛門の音が聞こえてくる。音が聞こえてくる。音が聞こえてくる。

吉福院賜車賣家三首絶涼

吉福院の音が聞こえてくる。音が聞こえてくる。音が聞こえてくる。

重福院家三首絶涼

おまかせの事はござりません

二月廿三日  
新嘉坡  
年光

ありうるありますと申せん  
お前はおまかせの事

望著戶很玄妙句十首丁巳泉

也。不以爲子也。而乃與之競  
也。豈不亦愚哉。

卷之三

其の事は、御心の事なり。御心の事は、御心の事なり。

吳中大納言詩句十首

之故舊如初。嘗與子雲、成玄英、張良愚、王叔濟、

德山先生  
卷之三

丁未年夏月  
王羲之書

四  
百  
福

此其所以爲子也。故曰：「子者，人之天也。」

正月の朝、五時半頃、お出でになつたのである。お出でになつたのである。

新刻元音集

あひの面おひの顔おひの顔おひの顔おひの顔

東坡集卷之二

凡五十九  
あも  
かく  
教ほ  
すま  
むと  
おも  
かげ

應永七年春以頓河自書而奉  
司空江義公寫之畢

三井行助

嘉慶八年正月廿二日  
九四五年

